

2019年にドイツで開催された東電福島原発大惨事関連イベントのご紹介
(4) 映画上映会とトーク(デュッセルドルフ市)
国本隆史・監督「ヒバクシャとボクの旅」、「最終処分場」

在欧環境ジャーナリスト 川崎陽子

(1)の記事で、「さよならニュークス・デュッセルドルフ(SND)」が開催した、樋口健二さんの写真展を紹介しましたが、2ヶ月余りの写真展期間中に、映像作家の国本隆史さんを招いて上映会とトークイベントも行いました。ちなみに、樋口さんの映像メッセージにドイツ語の字幕をつけてくださったのは、国本さんです。

まず、国本さんと私が寄稿しているサイト https://www.speakupoverseas.net/author/takashi_kunimoto/にある、国本さんの自己紹介文を転載します。

国本隆史 / KUNIMOTO, Takashi

映像作家。東京都国立市出身。
大学在学中に、原爆体験者調査に携わり、
NGO ピースポートと『ヒバクシャとボクの旅』(2010)を共同制作。
神戸の市民メディアにて、多文化な背景を持つ青少年の表現活動に従事。
福島第一原子力発電所事故後、ドイツに移住。
渡独後は、放射性廃棄物に関する『Endlager(最終処分場)』、
移民者を追った『Zweite Heimat(Home away from home)』、
『Warum ich Deutsch lerne(なぜ僕がドイツ語を学ぶのか)』などを制作。
ブラウンシュバイク美術大学在籍。



最初に上映した【ヒバクシャとボクの旅】予告編は以下で観られます。

https://www.youtube.com/watch?time_continue=3&v=NBIZ4cTYS5o

<https://vimeo.com/228556777>

【DVD 好評発売中】(問い合わせ先:ピースポート事務局)

かつて被爆者の証言を聞いても「どうすればいいのか分からなかった」という監督が、被爆者との船旅を通じて、「被爆経験の継承とは何か」というテーマをストレートに描いた作品。

ベトナムで枯葉剤被害者の話を聞いて「どうすればいいのか」と悩む日本の被爆者に、

監督は「自分と同じもの」を感じる。

2才で被爆し当時の記憶のない被爆者は、

ギリシャでナチス虐殺の最後の生存者らに出会う中で、

「われわれ被爆者もいずれ誰かが最後の一人になる」と口にする。

記憶のない「若い被爆者」たちは、自分たちは何をすればよいのか悩み、船内で活動を始める。

一方でカメラは、原爆について知識も関心もない

世界や日本の若者たちの率直な言動にも向けられる。

「私たちに何ができるのか。」

この問いが、映像をみた者たちに投げかけられる。

2番目に上映した「最終処分場」は、
以下のサイトから日本語で観ることができます。

https://www.speakupoverseas.net/author/takashi_kunimoto/

Author: 国本隆史 / KUNIMOTO, Takashi



ENDLAGER (最終処分場)

2011年3月、私は、福島第一...

CONTINUE READING →

国本監督との質疑応答

大学時代に社会学で原爆投下について学んだ際、長崎市を訪問して原爆と被爆者の人生、歴史上の原爆の意味を考えたという国本さん。
大学卒業後は、平和活動に関係ない製造業の分野で働いていたそうです。

その後、ノーベル平和賞を受賞した ICAN でも知られる、「ピースボート」の 103 人の被爆者の旅を撮影する仕事で、4 ヶ月間に 20 カ国以上を訪問しました。

誰かが言ったことを伝えるのではなく、自分自身で学び感じて考えたことを伝えていきたいと思って映画を制作したという国本さんとの質疑応答の中で、船旅に関するものの要旨を紹介します。

日本人男性： 映画の途中で、若い人たちが被爆者の話を聞いて、「みんな同じようなことを話している」、「ああ、またか」と思っていますが、一緒に旅をしていく中で変わっていったのでしょうか。

国本： 何人かの人には意見を変え、芝居を作って自分のメッセージを伝えるなど、パフォーマンスをした人たちもいました。幾人かの人は何もやらないで、つまらないままだな～というふうに思っていた人も知っています。ぼくは、それでいいと思っています。

日本人女性： 被爆者は、原爆が落とされた歴史的経緯とか政治的な状況とかを、ご存知でしたか。そういう話題はありませんでしたか。

国本： 被爆経験がある方が 100 人くらい乗っていたのですが、あまりそういう歴史的なこととか背景とかは知りませんでした。「僕が話したい」、「私が話したい」と話された内容は、「こんなひどいことが起きたんだ、こんなひどいことをされたんだ、我々は。どうにかしてくれ」、「これをどうにか若者に伝えたい」と。そういうことに、偏っていたんですね。

この旅をとおして変わったことというのは、他の被害者に会ってからですね。ベトナムの枯葉剤の被害者に会った時に、「あっ今こんなことが起きている。それをやった飛行機が日本から飛んで行ったんだ」とか。ギリシャで(ナチスの)被害者にあったときとか。他の例と比べることで自分の例を相対化していく。「じゃ、自分もそのことを伝えるためにも、他の事例も学ばなければいけないし、このこと背景とかも学ばなければいけない」と、なっていたんですね。

もう一つは、そういうことに気がつく、ただ被爆者の人が高い位置から知らない人に自分の証言をシェアするとか与えるという形ではなくて、被爆者の人も知らないことがいっぱいある、若者もいっぱい知らないことがあると、一緒に土台で作業ができるようになっていったんです。今ピースボートは一年に一回くらい、10 人の被爆者と 3~5 名の若者を一緒に船に乗せて活動しているんですけれども、その中で「じゃどうやったら効果的に話を伝えられ

るか」とか、証言会が終わった後に、何がよかったとか悪かったとか一緒に話し合っ、共同作業ができるようになってきた。それはすごくいいことだなと。

私の質問:日本では「原子力の平和利用」と言って、原爆と原発を全く分けて考えるという情報操作というか、見事にうまくいっているという印象を、ドイツにいると感じます。ドイツでは、「核兵器と原発は双子の兄弟だ」と一般に知られているので、「日本が、東電福島原発事故が収束しない状況でも原発の再稼働を続けるのは、核兵器のためにプルトニウムがほしいからだ」などの声が、普通に聞かれます。ピースボートの被爆者と外国の方々とのコンタクトの中で、今述べたような経験をされたかどうか教えてください。

国本: 3つのポイントがあります。1つ目は、トルコでジャーナリストが、「いい、わかった、広島と長崎の被害は。でも、なんで日本はそんなに原発をたくさんもって使ってるんだ」って言われて、そのとき僕たちは反応できなかったんです。被爆者の人も。しばらくは、何をいってるのかよくわからない。「何でそれが関係するのかな」くらいの反応だったんです。

それで、この旅をつうじて、その関係、核のサイクル、掘ってきて運んできて使って、どういふうに核がまわっているか、そこに原発がどう関わっているかがわかってきた。

日本が原発を動かしている中でウランが出てくるんですけども、なぜ持ってるかという、やっぱり潜在的に自分が核兵器を作って活かしたいからなんだと思うんですね。そういうことを学んで考えたりするようになったんです。

2つ目は、参加者の一人に東芝で原子力の開発に関わっていた人がいて、被爆者にもかかわらず、「平和利用はいいことだ」と思ったんですね。「こんなにひどいことを与えたものを、人類の技術の発展に活かせるんじゃないか」とずっと関わってきて、引退されてからここに参加されたんです。

オーストラリアで、首相にだったと思うんですけど、手紙を預けるという場面があって、「私は核の平和利用にずっと携わってきたけれども、それは間違っていました」と、手紙にはっきり書かれていました。

3つ目は、アイゼンハワー大統領が、核の平和利用を言ったと思うんですけど、日本の読売新聞とか政府とかが、「核の平和利用、すなわち原子力発電がいい」とプロパガンダ活動をしました。原発がこれから必要であるというイベントは、広島でおこなわれたんですよ、かなりショックなことに。

そのときに、被爆者の人たちも、「これはいい」と。「自分たちは、こんなに痛めつけられてこんなにひどいことになったけど、それを人類のいい未来のために使えるのであれば、これはやるしかない」って思うようになったということなんです。

さらに、国本さんの話を続けます。

映画の最後を、「旅は続いている」という形にしていますので、この映画の続きを作りたいと思っていて。でも、時間の問題というよりは、いつも考えが足りなくて、次は何をしたらいいかわからない状況になっています。

いつも日本に帰った時に、一緒に旅をしたおじいちゃん、おばあちゃんに合うようにしていて、もう被爆者の人というよりも、一家族のような関係になっていて、そういう関係が続いていること自体が意味のあることだと思っています。それは、ぼくだけの関係ではなくほかの人もそうで、何かというと、その人たちの関係を通じてもっといろんなものに目を向けられるし、今は核兵器の問題だけに目を向けていても、先に進まないというか。やっぱり核の、原発の問題もそうだし、そのほかの社会問題もそうだし。いろんな問題を考えていく一つのきっかけとして、そういう被爆経験を持った人との関係性というのは、自分にいい視点をもたらしてくれるので、それもすごく意味があることかなと。

(付記:イベント後に聞いたのですが、すでに何人もの方が他界されたとのことでした。)

2本目の映画「最終処分場」

2011年3月、私は、福島第一原発事故をきっかけに、ドイツへの移住を決めた。
その頃ドイツは、脱原発に舵を切ることを決めていたからだった。
ところが、移住後、住まいから15km離れた場所に、
放射性廃棄物が埋められていることを初めて知った。
その上、埋めた場所に地下水が流れ込む恐れがあるとのことで、
一旦埋めた廃棄物を、取り出す作業を計画しているところだと、現地の方から聞いた。
安全を求めて移住したこのドイツの地で、出会うことになった核のゴミの問題。
原発の平常運転で出る核のゴミ以外に、
廃炉や事故後に出てくる膨大な量の放射線レベルの高いゴミの問題にも、
まだ誰も解決方法を見つけてはいない。
放射性廃棄物が既に埋められてしまったドイツの村と、
そこから埋められたゴミが流出しているドイツの町で、それぞれの住民の舌先に話を聞い

「最終処分場アッセ」の映画のあとの国本さんのお話です。

福島の事故からこんなに遠くに逃れてきたのに、ドイツに移住したらアッセのすぐ近くだった。それまで、核廃棄物の問題はよく知らなかった。。地下水が流れ込んで、取り出そうとしても取り出せない。「じゃあ、世界中どこにも安全な場所はないじゃないか」と思った。

ドイツで起こった事例から、日本は学べると思っていたけど、「危険はありませんよ。大丈夫ですよ。これを受け入れたらお金がもらえますよ」ということで、結局やってることはすごく一緒のこと。政治家とか科学者とかも、事前に知っていたのに隠して。今何が起きているかという、すごいお金をかけて掘り出すか、それには時間もかかりますし、それか忘れる・・・しかない？(はっきり聞き取れず)

で、この次に日本はどうなるんだろうかと考えました。福島原発からは8年以上たっていますけど、核のごみや、空気中にも水中にも放射性物質が出ていて、安倍さんは東京オリンピックを決める時にコントロールできると言ったんですけど、全然できていない。日本が福島からでてくる放射性廃棄物を再利用していくっていう計画は、ぼくには受け入れがたいものがあるって、そういう国には住みたくないなと。では、だから海外に住んでいるのかといわれたら、そういうことでもなくて。

原発をなくしたいし、できれば核兵器も禁止して、なくしていきたい。それはすぐには終わらないと思うんですけど、続けていきたいし、努力している姿を子どもたちと次の世代にも伝えていきたいなと、そういう目的を持っています。映画の活動を通じて。

SNDは写真展の期間中に、国本監督だけでなく、鎌仲ひとみ監督作品を2回、「小さき声のカノン」と「カマレポ」の上映会も開催したことを付記します。私は出席できなかったのですが、「小さき声のカノン」は、2016年3月に鎌仲ひとみ監督が、ドイツのIBB(国際教育交流)から招聘された時に、有志で分担してドイツ語に翻訳し、国本さん夫妻が校正して字幕にしてくださいました。「小さき声のカノン」には、他にも多くの言語の字幕版があるそうです。「カマレポ」のドイツ語字幕は、ケルン大学日本語学科の学生さんたちが、作成して下さったそうです。(了)